

なにもない日々

大森 海太

九月に入った。七月から第七波とやらが始まり、猛暑と相まってなにもない日々が続くうちにもう九月、一年の三分の二が過ぎた。月日のたつのが早い。

思えば七〇代前半はいろんなことがあった。ゴルフ仲間とはマレーシアや台湾に行ったし、自転車仲間とはしまなみ海道や八丈島、浜名湖一周。その他アチコチの札所めぐりなどにも出かけたが、最大の出会いはOBペンクラブに入会したことだ。おかげで文章を書くことの愉しみを再発見できたし、新たに多くの方々とお知り合いになったのはなによりの収穫であった。

ところが七十五歳になったとたんに流れは一変。新型コロナウイルス、緊急事態宣言、なにもすることがない日々の始まりである。まあ二、三ヶ月の辛抱か、イヤ半年だといううちにもうじき三年だ。考えようによっては、高齢になればなにもない日があたりまえで、それが少し早まったただけだと言えなくもないが。

先日、同期のAから手紙をもらった。彼はだいぶ前に奥さんを亡くしてからは、小淵沢の山荘のひとり暮らしで馬に乗っていたのだが、昨年ヒザを痛めてからはそれも辛くなり、今回思い切って伊豆の介護付き老人ホームに移ったとのことである。

これにはちよつとショックだった。もしも長生きすればいずれ施設のようなところのお世話になることもあるかとは思っていたものの、まさかも同期が入るとは。

「ここは環境もよく食事も旨いし快適です」と書いてあるが、でも毎日何をして暮らすのだろうか？ そう思って自身の最近の日々を見直すと、そうは言っても朝粥の支度、後片付けやら、近所の散歩など日常の中に、些細な発見や小さな出会いがないわけじゃない。好奇心を持ってあたりに目配りを忘れず、身体に気をつけて新たな明日を待つのだ。

昨今、世界では多くの人が戦争や飢餓、洪水や干ばつで苦しんでいるのに、なにを寝言のようなことをと思うが、と言って嘆いてみてもどうなるものでもないし、まあトシ相応にいくしかなからう。